「出版の自由」と文学思想の交錯

植　木　敏　一

I

自由を愛するイギリス人の伝統的国民性に訴え，また言論の自由と読書の自由が人格の完成には必要欠ぐべからざる理由を縷々と述べて議会に対して出版物検閲制度の許し難き悪法を論述したアリオパヂティカは希望を述べる散文の賛歌である。①

1958年に「ミルトンの自由」② と題して論述したことがあり，「英文学研究」においてある批評家から注目を得て激励をうけたが，その後再批評が進むにつれて，研究の変遷が多少あり，ミルトンの自由なる理念にも忸怩たるものがあり，アメリカ批評の発展を主としたためにイギリス批評家たちの陳述を疎かにした憾みがあった。③

ところで，ミルトンはさておき，17世紀は簡単に云えば，小説および他の文学ジャンルにおいてロマンに対する反動が，所謂 anti-romance 即ち realistic なものに現われ，教養のある読者たちは何か新鮮な当時と異ったものを求め，中産階級の読者たちは現実的なものを好んだ。経済，政治，宗教などの不安の時代に小冊子が前時代に引き続き顔を出してきたといった復合的な文学の世界を我々に見せている。

しからば，この小冊子であるアリオパヂティカは当時どのような価値観をもっていたのであろうか。当時無数の小冊子が発行されたが当時では殆んど顧みられなかったというのが実情であったのである。これらを読む人はごく一部であり，アリオパヂティカが読まれたというのも一部であり，アリオパヂティカが読まれたというのも一部の人たちであり，その人びとの評価もその中に含まれている古典的知識の豊富さと，そのなかに存在している高き格調の認識に過ぎなかったのである。④ しかし，このなかに詩作は含まれていなくても，清教徒革命の目的と動機を暗示する点は重要なものとして受取ってしかるべきであろう。⑤ おなじように，17世紀の小説の評価も今日に至るまで十分な研究がなされていないことを見てもわかる。

アリオパヂティカはこれだけを読むものではなく，彼の他の小冊子 *Of Education* と *Doctrine and Discipline of Divorce* を併読することにおいて，アリオパヂティカ（1644）は理解が深まるであろう。というのは *Of Education* の書かれた5ケ月後，1644年11月に執筆を完了し，その前年1643年に始は長老派側からは軽蔑された *Doctrine and Discipline of Divorce* は書かれたといった時間的至近距離にある小冊子であったからである。

そもそも，1644年という年代は信教の自由が論争の中心であった。イギリスは勿論，全ヨーロッパにおいて，因襲的伝統と新しい宗教と衝突が起っている。ミルトンは自由に freedom と liberty との二語を当てているが，この両語の何れにも行動の自由と思想の自由，換言すれば動なる自由，静かなる自由とに区別して使用され，この区別が明瞭になってくるのは第三期の著作のなかにその明確化が認められると思う。そもそも自由の概念には政治的，社会的，宗教的観点から眺められるべき性質のもので，定義に困難性を伴うこ

とは現在においても同じことである。この自由の概念はミルトンが宗教，倫理，哲学に関する古典を読破し，宗教が国家権力（議会と政府）と手を結んだときの実生活において心のなかでの観察によって次第に彼の知識となってくる時機でもある。アリオパヂティカはイソクラス（前436—338）の演説に範をとったと言われているが，その範たるやヘレニズム時代の先駆と考えられたのだが，その目指すところはアテナイの利害が中心となっていた。つまり国益中心の問題である。また，ironic contexts に着目して次の通り，

> The irony Milton describes is clearly "the non-heroic residue of tragedy," that sort of irony which derives from a poet who, from the state of experience, looks at tragedy from below.

と云っているのが Jeseph Anthony Wittreich, Jr.⑥ であった。また特異点はミルトンがアリオパヂティカで云っているように，'the power within me to a passion' であった。⑦

元来，イギリスにおいては書物の検閲については15世紀の初めより存続していた。そしてヘンリイ3世以来チュウドル政権によって検閲が命ぜられていた。しかし，その後は印刷業者，出版社のギルドが代って出版の都度検閲するのが習慣になっていたが，検閲の制度強化の声が高くなって来ているのをミルトンは知らずに法皇の命令，トレント会議，カトリック本山の異端審理の宗教裁判と同一だと錯覚をおこし，教会と国家とが結びついたとの判断のもとにこの小冊子を書かざるを得ないという気持に追いこまれたのではないか。このような心理的状態にあって自由擁護の立場にたって筆を執った可能性は十分あったであろうと思われる。

また，アリオパヂティカには世にすでに流布していた出版物の検閲には全然言及されていないが，すでに出版されているもののなかには社会的危害を加える恐れなしとは云えないので，この方の検閲を先行さすのが一般の世情であった。Bulletin において述べたのを一部繰返す結果になるかもしれないが，国家とそれを代表する政治家たち，即ち最高裁判所である国会に向って演説する人びと，ある一個人の資格で何らこのような手続を取り得ないで社会の利益を促進していこうとするために文書を書く人びと。このような人たちの心には混乱と動揺のおこり得る傾向がある。これらの人たちの心理を掘り下げてみると，

1. 成功について疑問に思う心理
2. 他からの批判に対して心配を抱く心理
3. 結果に希望をもつ心理
4. 自信に満ちている心理

をあげることが出来るというが，ミルトン自身に，上に挙げた項目のいずれにも相当する心理に支配されておらなかったと断言できよう。

> Which though I stay not to confess ere any ask, I shall be blameless, if it be no other than joy and gratulation which it brings to all who wish and promote their country's Liberty.⑧

彼はいかなる出版物に対しても擁護するものではない。人間同様に書物にも生命力の存

在を認め，この書物のなかに知性の最も旺盛なる活動を認める。

Books are not absolutely dead things, but do contain a potency of life in them to be as active as that soul was whose progeny they are; nay, they do preserve as in a vial the purest efficacay and extraction of that living intellect that bred them.⑨

従って善良なる書物を保護するというのが，ミルトンの本心である。また検閲は善良なる書物を殺すに等しいとまで云うのである。彼の重視する理性こそは，また彼の理論の根本にある神から人間に対して与えられた一つの賜物であって，この理性によって人間は選択者の立場に立って広い範囲の活動が許されるのである。

when God gave him reason, he gave him freedom to choose, for reason is but choosing; he had been else a mere artificial Adam, such an Adam as he is in the motions. We ourselves esteem not of that obedience, or love, or gift, which is of force; God therefore left him, free set before him a provoking object ever almost in his eyes; herein consisted his merit, herein the right of his reward, the praise of his abstinence.⑩

＊a provoking object＝temptation

またこの小冊のなかで善と悪，good and evil と自由思想をどのように解釈すればよかろうか。ミルトンが青年時代に書いた「リシダス」と「キリスト降誕の朝に歌う」に善悪観の鈍光を見，「ラァレグロ」と「イルペンセロソ」のなかには薄光を見，「コウマス」において陽光をみる。ミルトンが齢を加えるにつれて，善は悪を征服するという思考の変化を示すが，他の後期の作品においてみるならば，

1. 失 楽 園――悪の一時的勝利
2. 復 楽 園――聖なる形体における善の終局的勝利
3. サムソン――人間の敗北と生命の犠牲において得られた善の勝利

といった善の勝利への結論をもっていく。Edward S. Le Comte は *Areopagitica as Scenario*⑪ のなかで，

Of course both *Areopagitica* and *Paradise Lost* deal with the limits of freedom, which was always Milton's subject. Both works portray temtation.

'Lasting fame' and 'mortal things' are but two of the phrases in *Areopagitica* to be found in *Paradise Lost*. (V 1. 866)

と述べているが善悪思想の根本理念の文学との交錯について触れている。そしてこれがそのまま「失楽園」へ発展していく。すなわち，アリオパヂティカにおいて，

And perhaps this is that doom which Adam fell into of knowing good and evil; that is to say, of knowing good by evil.

As therefore the state of man now is; what wisdom can there be to choose, what continence to forbear, without the knowledge of evil? He that can apprehend and consider vice with all her baits and seeming pleasures, and yet abstain, and yet distinguish, and yet prefer that which is truly better, he is the true warfaring Christian.'⑫

「そして，おそらくはアダムの陥ちた運命，善悪を知る。すなわち悪によって善を知るに至った運命である。だから人間の現状からして，悪の知識がなくては選択する分別がどこにあるのか，また抑える節制がどこにあるのか。内在するすべての誘惑と外観的快楽をもつ悪徳を理解し，思慮し，しかも慎んで識別をなし，真により善きものを選ぶことのできる人こそは，まこと戦うキリスト教徒である。」

理性を思考の出発点とした善悪の観念は，人間の自由意志と関係し，この善悪を識別してこそ人間の美徳をつくるという論究から，検閲を論じようとする。その選択する力を保持するためにはキリスト教徒としての鍛錬が必要である。そして人間の前に誘惑物が置かれるのである。

そして，再び書物そのものにかえるが，ミルトンは書物をして魂と同じように生命力を持っているものと考え善良な書物を殺すことは理性を持っている人を殺し，神の像を殺すに等しく，理性そのものを殺すのである⑬と断言するのである。

このような節制を重視し，理性が熱情を抑制しすべての知識をもって正しい道徳的な選択をなすという人生観は，「コウマス」を始めとしてスペンサーに負うところが多く，節度ある生活をして，特に学的活動を増しているものだとし，アリオパヂティカのなかにはスペンサーの人生観がミルトンに対して大きな支柱力となっているのではないか。また疑惑，不安，恐怖，忍耐，英知，勇気が顕著に現われている。また永遠なる救済だとも考えられる。そして，アリオパヂティカを起点として，このモチイフが「コウマス」「失楽園」、「復楽園」へと，世の闇と危険を通して永遠の救済へと辿りつこうとする真のクリスチヤンと解しようとする試みがある。

このように，アリオパヂティカを始めとしてミルトンの何れの作品にも，モチイフとして関聯性⑭があり，自由の思想は彼の死まで続いていく。この自由思想は宗教哲学の上に立ってはいたが，議会に対してその業績は業績として認めることに吝かではなかった。このように如才がなかったこともミルトンの一面を現わすことの一つであった。ところで，ミルトンの出版した動機を聞いてみよう。

But now the bishops abrogated and voided out of the church, as if our reformation sought no more, but to make room for others into their seats under another name; the episcopal arts begin to bud again; the cruise of truth must run no more oil; liberty of printing must be enthralled again, under a prelatical commission of twenty; the privilege of the people nullified; and, which is worse, the freedom of learning must groan again, and to her old fetters: all this the parliament yet sitting. ⑮

あたかも危機に追いこまれたかのように，自由迫害の一瞬であるかのように，革命前夜を迎えているかのように，我われの心理にせまってくる。ところが，検閲が行われていたのは群小牧師たちの手で，しかもその数たるや少数の人たちの手によってであったが——出版は革命中は官憲の統制の下におかれたが——ミルトンが出版の自由のような大問題に対して背教的な態度を誇示したことは決して最善であったとは云われないかもしれないであろう。だが再評価時代以前においては，アリオパヂティカは言論の自由を嘆願した小冊子であると考えられていたが，当時の社会状態を分析すればこのような考え方は肯定されるような材料は殆んどないのではなかろうか。従って宗教的，道徳的，政治的保障を求める個人的小冊子であるとする視点から考察するのが妥当性があるのではなかろうか。云いかえれば，これは人間各個人が神から与えられた理性と鑑識或は選択を行使するよう主張した点に彼の真意を汲みとることもできよう。この出版物に対する検閲は爾後出版しようとする書物に対しての検閲か，それともすでに出版されている出版物の検閲かという問題であるが，これは多分前者のみに限定されるであろうが，後者についても検閲の急務を兼ねて主張していることも理解できよう。しかしミルトンの真意としては，カトリック教の制度と一般の迷信—この当時科学思想の台頭と平行して迷信も横行していたが—を除外して，宗教的，政治的危機を前もって防止することにあったであろう。

そもそも新しい社会，新しい世界をつくりだすためにに自由に論義することによって世の啓蒙に役立ち得る確信があったからこそ，イギリス人に対してなしたのである。「この情熱，この英雄的精力は後の「失楽園」のなかにサタンとして再現されている。もちろん形こそ大いに異なるが，疑いもなくこの感情である。」[16] とテイリィヤードは云っている。

II

後世ミルトン批評家たちは，ミルトンの自由の理念の解明に務めてきた。自由思想の理念は Douglas Bush, A. S. P. Woodhouse, Arthur Barker たちによって，一そう明瞭になってきたと云える。その批評家たちは，自由を 'Christian Liberty' と 'Human Liberty' とに概念上区別することによって解釈の核心に触れようと努力した。今日においても自由の理念の分析は最も困難であるが，ミルトンは一応キリスト教的自由に拠ったのである。あくまで神を発想の起点[17] としていることはもちろんである。そして，ミルトンの自由に制限のあることにも云及している。そして， Barker の次の解釈において，

> Milton's liberty is theoretically limited at yet another point. It is not for licence that he pleaed, but for a freedom which the good man will exercise according to "the rules of temperance" exemplified by that Spenserian knight whose virtue is sometimes less Aristotelian temperance than Puritan renunciation."[18]

のなかの good man, rules of temperance のことばである。人間は神の創造物であり，神と同じ姿をとどめている。従って，人間は生れながら善を内包している。従って，人間のもつ悪も善と相対的に思考されるが，この世にあっては人間の善悪の分離の思考が不可能な状態である。これは後期の作品「失楽園」の アダムとイヴ の姿のなかに 見るのである。そして，善と悪の選択或は調和は各個人の良心によってのみ決定されるのである。

「善と悪とがこの世の中の畑の中で殆んど区別がつかないほどに成長していることは広く知られるところである。そして，善の知識は悪の知識と，縺れ合い，絡み合い殆んど識別がつかないほどに類似したところが多いので，不断の努力として選り抜き，別々に分類することをサイキに課されたあの混りあった種子もこれほど混りあってはいなかった。善と悪との知識が密着して離れない双生児としてこの世に跳び出してきたのは，味われた一個の林檎の皮からであった。多分これは善悪を知って，即ち悪によって善を知るようになったアダムの陥ちいったあの運命である。それ故にいま人間の状態であるが，悪の知識なくして選択すべきどのような分別がありえようか，慎むべきどのような自制があり得ようか。」[19] とミルトンは云う。続けて悪徳とそこからくる誘惑と快楽を考え，これらを見分けて真に，善きものを選び得るこそ，真の戦うキリスト教徒であると，また訓練もなされず，鍛錬もされない逃げ廻る美徳は称賛できない，また悪徳を調べて知ることが人間の美徳をつくるために非常に大切なことだとも云っている。

このようにキリスト教的自由の解釈は，ミルトンが，それ以前の自由の概念の路線を歩いているように思われ，もし彼が急進的自由論者だと云いうるならば，聯か思考的焦燥感を彼に対して抱くであろう。この焦燥感が彼の自由の理念の制限が何らかの形で影響を与えているのであろう。

また，Edward S. Le Comte のいう 'lasting fame' と 'mortal thnig'sが「失楽園」にあるように，アリオパヂティカにおける言葉の二つであるに過ぎないといい，この両者は自由の主題でもあり「誘惑」を描写するものだ[20] と再評価を与えていることは注目に値する。このようにして，神，理性，善悪，節制の法則，選択，美徳のような問題を検討していけば，彼の文学作品とも何らかの相関的関係を想起するであろう。また，Comteは散文と詩との密接な関聯性について論述された諸学者の論文を引用しているが，これらの散文についてその効用に関して次の如く云っている。

> *Areopagitica* is not polemics, like the 1641–42 episcopal assaults. It is not a tractate. As oratory it is one of the "organic arts" that Milton had linked with poetry a few months before. "According to the theory of poetry that Milton accepted, the poet and the orator share the desire to move men to virtuous action. Persuasion, the end of oratory, is also part of the function of poetry"…… Haller finds Milton wrote not a pamphlet but a poem. Wolfe sees "a broad humanism fresh as the spirit of plato's praise of music or Sidney's paeans for poetry." Barker is reminded of the "Nativity Ode."[21]

このアリオパヂティカに詩性の存在を認め，Haller の言を引用して詩だと断定へと導こうとする批評態度は肯定できようか。韻文と散文との差異は困難なるものを生じる。すべて人の心を感動さすものが詩であるとの断定にはいささか戸惑うのである。アリオパヂティカがすべての作品において，大なり小なり思想的基盤となっており，文の韻律の流動性は否定できなくもないであろう。しかし，当時の現実社会との関係について Bush は「このアリオパヂィティカは結局いかなる党にも話しかけておらず，当時の緊急な問題に解決を与えなかった。当時の人びとが小なる出版と見なしていたものを扱い，そしてその論争は決してそれを提出する方法と同じように独創的なものではなかった。」[22] と云っている

が，文学としてみた場合と当時のアハオパヂィティカ出版された事情とは価値観が異なっていることに気ずくであろう。

再び云えば，ミルトンをしてアリオパヂティカを書かしめた動機とも云べき出版に関する命令（1641年1月公布）すなわち，"That no book be printed, unless the printer's and the author's name, or at least the printer's be registered."㉓ は極めて穏健な自由主義的な出版法であるにもかかわらず，"They, who to states and governors of the commonwealth direct their speech, high court of parliament!"㉔ とか "Lords and Commons of England!"㉕ と何故に敢えて呼びかけねばならならなかったのか。ミルトンは「宗教の点で人間の知識および論争はこの世の中から取り除かねばならぬ。聖書それだけだ」と云ったがまさしく聖書の信条を固守する自由信教派というべき人であったから，自然国教廃止論の立場にあった。しかし，行動へと徹底的に移してゆくほどの積極的な面を見ることが出来ない。長老派が自由のために戦い，次第に監督（ビショップ）にとってかわると，また同じように自由を蹂躙するに及んで，彼は長老派に対してそれまでの好意は敵意に変貌してきた。このように大胆なほどに一見自信にみちているアリオパヂティカを出版したことについては種々な推理がなされている。小冊子時代と云われており，またその当時においては，多数という表現は却ってアリオパヂティカの存在理由を曖昧模糊たらしめる恐れがある。Hilaire Bellocは，「小冊子出版の時期に政治的意味がなかったにもかかわらず政治性を付与した。そうしなければ，出版自由なる小冊子を世の人びとに注目させる効果がなかったであろう。」㉖ とまで云っている。いかに政治性を付与したしても，これら小冊子に注目する人は少数の人びとを除いては殆んど存在しなかったであろうし，実際読む人も稀れであったろう。この小冊子はこの時代ら，近代国家へと成長してゆくにつれて，イギリスにおいてイギリス国民の間に自由思想，特に出版の自由の思想の関心が高まり，19世紀になって認識の段階にのぼったのである。それは，*The Christian Doctrine* がミルトンの生存中には発見されずに1825年にDr. R. Summer が翻訳のうえ，注を書きしるしてから始めて関心のある人びとに読まれるようになり，ミルトンの古典の一つになったと同じように，生存中に詩人の思想が解明されることがない場合もあった。その故にアリオパヂティカもイギリスにおいて後世出版における自由が人びとから支持を受ける機会に遭遇したのであった。国家が現存し，国家権力が何らかの形において検閲することは，当然のことであり，アリオパヂティカのような内容で印刷が不可能になるであろうということは考えられもしないのに，ミルトンはなぜこのような挙に出たか現代においては思考し難いものであった。これについて直情径行の型でもあり，また情熱型の人ミルトンにおいては心理的な面からいろいろと考察が可能であろう。

The Doctrine and Displine of Divorce（1643）のなかで個人的或は人間的自由を書いたが，不幸にも注目されなかったのその翌年に *Areopagitica*（1644）を執筆してキリスト教的或は公的なる自由を論究し，自分の心のなかにある古典的知識および学識の蓄積を吐露し，時機をうかがい直ちにこの小冊子を出版した。この好機を選ぶ心の構え方も決して軽視できないであろうし，また彼の心をクロムウエル——1949年ミルトンはクロムウエル共和政府を擁護し政府のラテン語書記に任ぜられたが——の方にも向けていたであろう。To the Lord Generall Cromwell, May 1652のソネットＸＶＩのなかにはヨーロッパ民衆とイギリス民衆に対して賞賛のみならず警告があるが，アリオパヂティカの雄弁の心の流動がこのソネットに振動を伝えていることも見逃されない。

また Arthur E. Barker が云うように，アリオパヂティカの結論はキリスト教的急進派の人びとが以前から，宗教的自由の原理に到達していた結論であって，[27] このままで終決するためには，この小冊子のもつ内容的軽度性を執筆前より感得していて，内容を崇高荘厳になるしめるためにペダンティックだと批判されるまでに知識，学識の宝庫を可能なるまでに開陳したのであろうと思われる。その結論とは，出版の自由が少数者の手に握られると虚偽が信じられるようになり，また論争が熾烈化するのを恐れて，もしこのようなことになれば，最高では自由そのものが危険におち入る。それ故に虚偽に対する忠告を受け入れて匡正することこそ美徳であるとする。この美徳こそ自由なる国民の目的であると考えた。また，ミルトンは自己の心の文学の情熱の世界にあって，イタリア旅行から帰っての興奮のいまだ覚めやらぬときにおいて，文学者としての名声をかち得たいという心のなの焦燥感も一部手伝ってのことであったろう。宗教の世界と文学の世界の二方向に心が向けられていたのではなかろうか。

また，ミルトンの意図としては読者に，いや民衆に，いや貴衆両議員の人びとに読んでもらおうということだったが――実際はその裏目に出たのであったのだが――この小冊子の口調から判断すれば，人びとに語りかけるというよりは，むしろ自分自身に語りかけてその語り口に，また学識に，文学的才能に陶酔しているように思われる。

もし散文文学として成立する場合に，風刺，皮肉，隠喩，心象，空想的理念――理想主義からくるのであるのか――の要素が混在しているのにもかかわらず，文学として読者の心に訴えることの少ないのは何故だろうか。結局宗教的立場からと，キリスト教の既成概念の立場から立ち向ったことがその原因ではなかろうか。しかし従来のキリスト教的自由の概念を拡大した点と彼の勇気の点においては大きな仕事であったことは否めない。

III

このように再評価の学者たちの論述を検討するにあたってアリオパヂティカに対する20世紀の評価として文学的意義と価値については一応認めながらも，依然として自由，特に出版の自由についてはもちろん，小冊子執筆の動機の分析とか，とにかく自由の理念そのものに釈然としなかったが漸次その全貌が明察されてきた。まず考えられることは，因襲的な自由の理念を踏まえながらも，小冊子「離婚論」には個人的自由が，小冊子「出版の自由」には主としてキリスト教的自由が取扱われ，その上後者にも個人的自由の理念が二重写しの感なきにしもあらずという印象を与えている。しかも自由そのものにはプラトンの自由理念などが混入し，結局自由の概念そのものがどうあるべきか，どうなるのか危惧の念を抱かしめることもあるのではないか。現実の世界ではどうだったろうか。ミルトンがクロムウェルの共和政府の要職にあったときに検閲を彼の理想どおりに処理していたであったろうか。また，「離婚論」においても離婚から再び条件つき復縁の可能性のあることを考えれば，自由の理論の絶対性も危やしくなってくる。理想主義者は理想に斃れるとか，言行不一致といった現象もつい云いたくもなるであろう。また極端な小冊子作家にあってはキリスト教的自由はとどまるところを知らないほどに本質上自由が変貌していくので，自由なる定義は困難になってくる。そして勢の赴くところ革命の色彩を帯びてくるのである。[28]

これはミルトンの自由意志，選択によったのであろうか。共和政府の要職に就いたことで理解ができよう。結局当時の検閲制度の法律が緩慢であったことを世に熟知させたこと

に過ぎないと云うことになってくる。

再び云えば，彼の自由の概念が離婚の小冊子のときと，この出版の自由の小冊子のときでは変化を示していることである。すなわち自己に有利なように自由の理念を色ずけていることである。この時点においてはミルトンの信条と神学論の基礎が安定性を欠ぎ，*The Chritian Doctrine* (1644—1658の作）と同様に，この「出版の自由」が文学作品のなかに入って根本的に思想が繋がると考えられるとしても——実際はそうであるが——一連の散文がすべて文学的作品として芳香を放っているとは云えないだろう。

しかし，このアリオパヂィティカの熱烈な，しかも真摯な態度は文学として読む人びとの心のなかに厳粛な気持を喚びおこす効用はあるであろう。

参 考 文 献

① Dougls Bush, *Paradise Lost in Our Time*, Peter Smith, 1957

② *Bulletin of the Faculty of Pedagogy*. Kobe University, Vol. 17, 1958. *Milton and Liberty*

③ Dr. James Thorpe, his letter says as follows;.
"America and England seem to me so intergral that I find it hard to imagine treating one without the other.

④ *Milton Criticism* ed., by James Thorpe, Routledge & kegan Paul Ltd., 1951 p. 3

⑤ Douglas Bush, *John Milton*, Lowe and Brydone Ltd., London, 1965 pp. 98-99

⑥ *Milton Studies* IV, ed. by James D. Simmonds, *Milton's Areopagitica : Its Isocratic and Ironic Contexts*. University of Pittsburgh Press 1972. Cited from Morth Fry, *Anatomy of Criticism*, Princeton, 1957, pp. 224

⑦ *The Student's Milton*, *Areopagitica* p. 732, 1. 7.

⑧ Ibid., p. 732, 1. 9-13

⑨ Ibid., p. 733, 2. 12

⑩ Ibid., p. 741 1. 28-37
See Patrick Cullen, *Infernal Triad. The Flesh, the World, and the Devil in Spenser and Milton*. Princeton University Press, Princeton and London, 1974 p. 99
"*Comus*, *Paradise Lost*, *Paradies Regained*, and *Samson Agonistise* focus on temptation; and with the possible exceptlon of *Comus*, all of them make the Flesh, the World, and the Devil the basis of temptation.

⑪ *Achievements of the Left Hand*, ed. by Michael Lieb & John T. Shawcross, *Essays on the Prose of John Milton*, the University of Massachusetts Press, p. 122 p. 122—p. 123 1974

⑫ *Aeropagitica* p. 733 2. 12

⑬ Susan Egloff, *The Journey Motif in Milton'n Poetry*, University Microfilms Limited edition, 1972 p. 20

⑭ Michael Lieb & John T. Sawcross, *Achievements of the Left Hand*
ミルトン学者たちの始めての散文のみの評論を集めたもので、面白い。

⑮ *Areopagitica* p. 746 1. 3-13

⑯ James Thorpe, *Milton Criticism*, Routledge & Kegan Paul. E. M. Tillyard, *Paradise Lost*; *Conscious and Unconscious Meanings*, p. 200

⑰ See *The Student's Milton*, *The Tenure of Kings and Magistrates*, p. 756 2. 17
"All men naturally were born, being the image and resemblance of God himself."

⑱ Arthur E. Barker, *Milton ande the Puritan Dilemma 1641-1660*, The University of Toronto Press, 1942, p. 97

⑲ *Areopagitica*, p. 738 1. 22-36

⑳ Michael Lieb & John T. Shawcross, *Achievements of the Left Hand, Areopagitica as a Scenario for Paradise Lost* pp. 122-123

㉑ Ibid., p. 121

㉒ Douglas Bush, *Paradise Lost in Our Time*, Peter Smith, 1957 p. 35

㉓ *The Student's Milton, Areopagitica*, p. 753 1. 50-52

㉔ Ibid., p. 731 2. 43-44

㉕ Ibid., p. 748 2. 3-4

㉖ Hilaire Belloc, *Milton*, Cassell, England, 1967 p. 167

㉗ Arthur E. Barker, *Milton and the Puritan Dilemma* p. 83

㉘ Ibid., pp. 95-99